

二〇一九年七月一九日

夏木立抽んでてをる時計台

みづき

大師像臨む裏見の滝すだれ

素 秀

荘涼しどこに立ちても水の音

菜 々

鉄塔の踏んまへ立ちし青田かな

はく子

おほかたは鬼籍や黴の紳士録

うつき

岩清 水両手で掬ひ漱ぐ

素 秀

くつきりと潮目を見せて夏来たる

たか子

二〇一九年七月一八日

夕立去り雀来てゐるにはたづみ

みづき

五条坂深き軒端に吊り忍

みづき

二〇一九年七月一七日

白桃のするりと剥けしうれしさよ

はく子

梅雨じめりして朝刊の手に重し

満 天

腰かけによき切株や避暑散歩

菜 々

山荘の小径を綴る苔涼し

せいじ

四阿に見下ろす夏の海まさを

やよい

二〇一九年七月一六日

常濡れの一寸仏岩清水

小 袖

朝蟬やけふの予定の目白押し

やよい

夏越とて噴井の水を家苞に

うつき

萱草の彩る径を山荘へ

菜 々

瀬の岩を研ぐごと激つ梅雨の溪

せいじ

行厨は半夏生咲く四阿に

はく子

青楓トンネルなせる溪の径

明日香

部活女子素足で駆ける海岸線

宏 虎

二〇一九年七月一五日

天空てふ駅眼下とすピアホール

なつき

沖汽笛間遠に聞こゆ夏座敷

みづき

航跡の帯となりたる夜光虫

素 秀

夏料理海の藍なる食前酒

みづき

空腹に響くや午下の牛蛙

やよい

二〇一九年七月一四日

海開き神事待てずに駆けだす子

素 秀

早天の祈りに和して蟬しぐれ

せいじ

夕鐘の音の間遠に時鳥

みづき

二〇一九年七月一三日

到来のメロン切り分け仏へも

菜 々

毎日句会みのる選・二〇一九年七月二日